

4月初旬、いまだ深い雪に覆われた畑に
愛用のバイオリンを持って立つ牧野さん。
農業従事者が主要団員の
「農民オーケストラ」を率いる。

牧野さんの手にあるのは、
自らが有機栽培で育てた「貝豆」。
インゲン豆の一種で北海道の在来種だ。

Special Feature / Beyond ON-OFF

Part
1

農をなりわいとする人たちには、
「農閑期」という余暇がある。
この期間に集中的に
練習し、年に一度
コンサートを開く
ユニークなオーケストラが、
北海道にあるという。
余暇はいかにして芸術へと花開くのか。
代表の牧野時夫さんにうかがった。

取材・執筆／野村 麻里 撮影／名取 和久

大地に響く人生

のシンフォニー

大自然のリズムとともにある農業。
その農閑期に練習を重ね、
年に一度、
披露目のコンサートを開く。



清明な水を湛える余市川。
余市は、ウイスキーの醸造
所があるほど水のいい町と
して知られる。また北海道
の中では温暖な気候である
ため、果物の栽培が盛んだ。

室内楽もできるドームハウスを建築中。
使っている北海道産カラマツには
ねじれる性質があり、ドーム向きという。

収穫した果実は
ジャムやジュースにして販売する。
写真はルバーブのジャム。

Special Feature Part 1 / Document



春先というのに、北海道・余市は一面の雪に覆われていた。真っ白な丘の斜面にサクランボの木が整然と林立する畑で、牧野時夫さんが枝の剪定に励んでいた。12月から翌年2月へと続いた約3カ月間の「農閑期」を終え、次の実りに向けての作業が始まっているのだ。

サクランボの他に、ブドウ、リンゴ、ジャガイモ、カボチャ、ダイズなど多品種の作物をすべて有機農法で栽培する牧野さんは、もうひとつ、別の顔を持っている。農業に関わる人を中心に結成された、ユニークな楽団の代表としての顔である。

農民だけのオーケストラ

「北海道農民管弦楽団」、通称「農民オーケストラ」は、1994年夏に結成され、20年近く北海道で活動を続けてきた。現メンバー約80人のうち、農業従事者が十数名、他に農業試験場の研究所員や農業改良普及員、大学の農学教師、農業を学ぶ学生などで構成されている。練習はもっぱら農閑期に行い、毎冬、年に一度のコンサートを開いている。

メンバーは道内中に散らばっているのですが、ひとたび練習となるや、遠く中標津や別海、美深など、何百kmも離れたところから練習場所の札幌に集まってくる。全員が揃うのは難しく、11月頃から始められる、たった10〜12回の

治が理想とした生き生きとした文化はまだ実現できていないと思うんです。時代は違うけれど、自分が達成できたら、と」

賢治没後80年にあたる今年（2013年）1月27日、農民オーケストラは、岩手・花巻で第19回定期演奏会を開き、「岩手農民大学」が制定する第22回「農民文化賞」を受賞した。花巻で『田園』を演奏できたのはよかった、と牧野さんは顔をほころばせる。ベートーベンの交響曲第6番『田園』は、賢治が最も愛した楽曲であり、第1回コンサートでも演奏した、思い出深い曲なのである。

生きることは、表現すること

練習の合間には、音楽の話よりもむしろ農業の話をする人が多いという。近しい農家仲間だけで話すのとは違い、メンバーにはいろんな分野の農業関係者がいる。研究者と、多様な角度から農業の話することもできる。練習の場は、貴重な情報交換の場にもなっているのだ。おもしろいことに、オーケ



余市に住むメンバーで行う練習は、公民館の一室で。子どもらや赤ちゃんも交え、リラックスした和やかな雰囲気演奏が始まる。

Special Feature Part 1 / Document

農民が いかに芸術を 興せるか

大阪生まれの牧野さんは、3歳でバイオリンを始めた。北海道大学農学部

練習で本番にのぞまなければならぬ。集まる機会の少なさを補うべく、時に合宿を組み、本番直前の長時間練習を欠かさない。それでもメンバーが「オーケストラの活動が生きがい」「農閑期の活動が楽しみだから、春夏の仕事が頑張れる」と言ってくれると嬉しい、と牧野さんは語る。

「音楽は、生きるために絶対に必要なものではない。けれど、芸術のない世界に生きる価値があるのか、と思うんです。人間に生まれてきたからには、人に何かを伝えたい。その手段が、芸術なんだと思います」

娯楽として享受するだけでなく、表現として音楽をやることに、意味があるのだ。

「伝えたいことを言葉にするのは難しい。でも音楽なら、言葉よりもストレイトに伝えられることがある。農家がやっているオーケストラだから伝わるものがあると思っています。農業は食べていくための手段ですが、農業は食べていくからこそ、好きな音楽もできるんです」

牧野さんは、コンサート会場の手配や宣伝などの準備作業も担う。同じ会場を使えば多少楽になるが、手間をかけても毎回会場を変えている。道内中にメンバーがいるし、より多くの人に演奏を聴いてもらいたいと思うからだ。

メンバーの男女の割合は半々くらいだが、年齢は10代後半から70代と、実に幅広い。なかには、40歳を過ぎて初めてバイオリンを弾き始めた人もいるという。

「十勝の農家で、始めた頃は楽譜が読めずに全部暗記していたという男性がいましたよ。でも始めて3年目には、もうコンサートに出ていましたからね」

と、こともなげに話す牧野さん。オーケストラにいろんなレベルの人がいることは、さほど問題ではないのだという。

「管楽器は、オーケストラにおいては、基本的にひとりで1パートすべてを吹かなければならないので、ある程度はできないといけません。バイオリンなどの弦楽器は大人数で1パートを演奏するので、極端に言えば、弾けるところだけ弾けばいい（笑）。コツはいるけど、初心者でも弾きやすいんです。チェロは、楽器の構え方が比較的簡単だから、さらに始めやすいですね」管楽器は、肺活量が必要から70代くらいまでかな。弦楽器なら、80代、90代でも続けられますよ」

へ進み、大学の交響楽団に所属。卒業後は、山梨と岡山でワインメーカーに勤務する傍ら山梨交響楽団や岡山交響楽団でコンサートマスターを務めるなど、学業や仕事と演奏活動とを両立させてきた。農民オーケストラの構想を考えたのは、大学時代。農家によるオーケストラをつくらうと思った理由を「田舎ではなかなかクラシックを楽しむ機会がないし、クラシックと聞くと敬遠する人もいる。農村で、農閑期の間、何かクリエイティブなことができればと思ったんです」と、語ってくれた。

農村でクリエイティブな活動を、という牧野さんには、大きな先人の影響があった。宮沢賢治である。

作家であり、教師であり、農民でもあった賢治はまた、音楽を愛する人でもあった。不器用なチェロ奏者の物語『セロ弾きのゴーシュ』を書き、自身もチェロを演奏し『星めぐりの歌』といった楽曲を残している。さらに、農民がいかに芸術を興せるかという芸術論『農民芸術概論綱要』も著した。賢治はまた、農学校の教師を辞めた後、農民塾「羅須地人協会」を開いたが、ここでは農業技術を教えるだけでなく、レコード鑑賞会を開いたり、楽団を結成して楽器の練習に励んだりもしていたという。

「僕は、童話や詩よりも『農民芸術概論綱要』で書かれたような、彼の生き方に興味がある。彼がやるうとしたことに魅かれたし、現代の農村でも、賢

と、実におおらかなのだ。

余暇が育てた 芸術

最後に、余市に住むメンバーが集まった練習会でその演奏にふれることができた。公民館の一室に十数人が集い、子どもらがのびのびと遊び、譜面台横に置かれたベビーベッドで赤ちゃんが機嫌よく笑う和やかな雰囲気の中が始まったのは、パッヘルベルの『カノン』である。部屋はたちまち温かな空気で満たされ、ホスピタリティにあふれた演奏が、聴く者の心を優しく包みこんでいくようだった。これこそが、彼らにしか出せない、唯一無二の音である。

農業という労働で結ばれた人たちが、農閑期という余暇を使ってやるからこそ、成し得る表現がある。賢治が今、農民オーケストラの演奏を聴いたら、どんなにか喜んだことだろう。ふとそんな想像をしてしまうほど、音楽を奏でる幸せに満ちた「時間」が、そこには在った。



農業関係者といつても
分野や所属団体はさまざまで、年齢も幅広い。
みな演奏を心から楽しんでいる。